龍とカナリヤ

モト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍とカナリヤ

【Ｎコード】
Ｎ２７０２Ｉ

【作者名】
モト

【あらすじ】
四十半ばの流れの剣士と見た目「十五歳位の少年」の、とある旅路の物語。ほのぼの、まったり、時々アクションのライトファンタジー。ИＣＴИＨＡ―イスティナ―　番外編…ですが、コレ単体でも読める物になっております。

終着地点―プロローグ―

「もう一度、この手を引いて、くれますか？」

【墜落】

…ついに俯瞰を喪いながら、
それでも遠慮がちに伸ばされた、
その指先に、
微かに触れた…。

俺は、
その時初めて
そのカナリヤの
鳴声を聴いた。

―　龍とカナリヤ　―

It is before 10 years…（前書き）

こちらはまったり更新です。
気が向いた時に更新という感じになると思いますが
お付き合いいただけますと幸いです。

It is before 10 years…

部屋の角隅に一人の子供が膝を抱えて蹲っている。丁度、長く伸び放題伸びたプラチナにその華奢な身体が殆ど埋まっている様な格好だ、そうしてそのまま数時間動く気配が無い。

俺はその部屋の丁度対角線上の角にある、一人掛けのソファーに腰掛けて活字を追っていた。時折様子を伺うが、それから変わる様には思えなかった。

思わず溜息が漏れる。

面倒臭ぇ、何でこんな事になったんだ…。どうせならあの時一閃で斬り伏せててしまえば良かった、と過去の自分の行動を省みて反省した所で、現状が好転するわけでもない。

否…余りに意外過ぎたのだ。想像と掛離れていた…俺の敵。

初めて見た時には既に満身創痍と言った具合で、その黒髪だけが痛んではいたものの何とか保っていた、といった具合で鉄柵の中で殆ど恰もそれこそぼろ雑巾の様に転がっていた。

次に見た時には、この俺でもが戦慄を覚えるほどの圧倒的な脅威だった。

その髪はプラチナに、左の光彩は金色に晒っていた、破滅の申し子…。

だからその時斬り捨てておけば良かったのだ。けれど、それが出来なかった。覚悟はとうに出来ていたのに、鞘走って今ぞというその時、思いがけず伸ばされた手…その手を、取ってしまったのが全て過ちだった。

再び溜息が漏れる。

さて、コレをどうしたものか…。

子供は…見た目は十歳位に見えた。だが実際の所はもう十五歳になるという。背は小さく痩せていて、その肌の色は抜けるように白かった。

その瞳は深い海の底の様なコバルト、しかしそこには何も映っていない様だった。…というか、感覚と情動が一致していないかの如く無機質で、抜け殻の人形そのものだ。

まったく、自分で自分がどうかしていたとしか思えない。情か、そう思うと俺もまだヒトであったのだな、と感慨深く思った。

「…おいお前、俺はお前を助けてやったわけじゃあないんだぞ、俺がお前を殺すんだからな。」

向かって言った、その言葉はただ部屋の壁に跳ね返って宙に消えた。

聞いているのかいないのか、それは微動だにせずに長い足を折りたたみ、膝に額を押し当てる様にして蹲っていた。

あと一体何日はこのままなんだ…、そう思うと酷く憂鬱な気分にな

った。

It is before 10 years…（後書き）

すみません、いきなり未来話から過去話に着陸しましたが…
次からが本編になります。ご了承ください。

よろしければ感想等お聞かせ下さい。
「おかしいな、涙が出てる、一つも哀しくなんかないのに…」と言いながら宇宙空間で狂喜乱舞します。

Then 2 years later（前書き）

それから2年後…

Then 2 years later

ああ、どうしよう。こんな目に遭うなら、隣町までなんて出歩くんじゃなかった。布の鞄をギュッと胸に抱いて、私はほとほと途方に暮れていた。風に煽られて丈の高い細長い葉の草々ザワザワとうねっている。それが彼らの笑い声と相まって薄気味悪くただ響く。私の左右はそういった草に覆われていて、私の前と後ろには砂利の細い道が真直ぐに伸びている、それを遮る男たちが5，6人。既に周囲は薄暗がり、こんな山道で他の人が通りかかるとは思えない。

「金目の物は置いて行きな。身に着けてる物は全部だぜ？　全部。」

私を取り巻く男の中の一人が言って、残りが下品に笑った。この一本道だ、とても逃げ切れるとは思えない。彼らは手に手にナイフや短銃を携えて、わざと私に見えるようにチラつかせていた。そういえば、この辺りは物取りが出て物騒だって、だから日のあるうちに帰ってきなさいって、母さんが言っていたっけ？

「私…何も持ってません！」

言って後ずさりして隙を探るけれど、どうにも逃がしてくれそうにない。そのうちに、一人に腕を掴まれた。

「…っやめて！　放して！」

振り払おうとして身を捩ってみるけれど、そこはそれ、男と女の体格差だ。力づくで抑え込まれたら逃げ遂せられる訳もない。彼らはまず鞄を奪うと、仲間の一人に投げてよこした。受け取った男は手を突っ込んでその中を勝手に（そう、勝手に）弄って、金目の物を

探している。そうこうしているうちに羽交い締めにされた私はそのままズルズルと道から藪の中へと引きずり込まれる。

「ちょっと…やめて、放して、何するの…！　どこ触…いや、いやぁぁ！！」

急に怖くなって、我武者羅に叫んでみる。でも頭のどこか隅で冷静に自分を見つめる自分がいて「無駄だ」と悟っている。何をされるの？　ってそれが分からないほど幼くはない。ただ、こんな誰とも判らない奴らに身を赦すなんて気持悪い！　それになんか、臭いし、汚いのよ！　厭で厭で、とりあえずは叫んで抵抗してみる。そんな私の行動すらも面白いのだろう。彼らはゲラゲラと笑いあっている。四人がかりで手足を抑え込まれたら動きようがない。なんだか悔しくて涙が出てきて、声の限りを尽くして泣き喚いた、その時だ。

「…さっきから、煩いことこの上ないなぁ。」

どこからか、声がした。

「折角人が眠りの淵に落ちようとしているのに迷惑な輩だ。お前、ちょっと行って黙らせてこい。」

ハスキーな男の声だ。やった！　人がいた、これで助けてもらえる、そう思った。

「…嫌です。」

もう一人、少し高い声がして…嫌って、ちょっと待ってよ！　助け

なさいよあんたぁ！

「誰だ！」

男達が辺りを見回しながら、手に手に武器を握りしめ、空に向かって叫んだ。だが会話の主たちは全くそれを意に介せずに続ける。

「…そんな事言うなら、ご自分でされればよいでしょう？」

「…面倒臭ぇ…。」

「…私も同意ですね。」

「いや、とにかくこれも修行だと思って一発黙らせて来い？」

「…仕方がないな。」

一瞬、静寂が訪れる。雲が流れて山々に掛ったばかりの月光を遮った。木々が大きく撓りざわめき、虫の声がさっきより大きく聞こえた気がした。暗闇の中の静寂、かえって何も起こらない事が気味悪くいのだろう、男達が周囲を見回している。そうして再び月光が差し込んで私達を照らした。そう、誰もが息を飲んだ。その時だ。

白羽の矢が立つ所を実際に見たらこんな感じなんじゃないだろうか？　と思えるような…鋭い勢いで白い物が急に空から降ってきた。言うに堪えない耳障りな（ああ、多分あれは骨が折れたんじゃないだろうか）音がして、私の目の前で立っていた男が、白眼を剥いて倒れ伏した。そうしてそいつの背中の上には、先ほどの白い矢の正体が無機質に立っていた。

輝く銀色の長い髪を高く一つに纏め上げた、歳の頃なら十五歳位の少年が月明りを背負って立っている。

「…なんだてめぇ。」

「何しやがる！」

お決まりの台詞を言って、男達は立ち上がり、彼に向かっていく。ああ、危ないわ、見ていられない。そう思った。

けれど…彼らを見回して少年は溜息を一つ吐いた。その両手は外套のポケットに突っこんだまま、ヒョイと身軽に飛び上ったかと思うと、物干し竿のように足を回して蹴り倒す。あまり機嫌が良くないのか、蹴り倒した相手の顔面を更に踏んで、挑発的に残党を見た。次に、殴りかかろうとした相手のその拳を身を少し倒してかわすと懐に潜り込み、掌で顎を打ち込むようにしてそのまま地面に相手の後頭部を打ちつける。これで、三人が倒れた。

私は服を整えながら、何とは無く彼らから距離を取って離れて見ていた。いや、巻き込まれたくないし。

それから、背後に迫っていた奴に肘で鳩尾に一発叩き込み、ひるんだ所でそいつの腕を取り、背負って投げ飛ばす。投げ飛ばされた奴はもう一人の仲間にぶつかって、二人が昏倒する。凄い！

「…。」

少年が私の方を見た。見られたこちらがどぎまぎしてしまいそうなほど、綺麗な造りの顔だった。

「え？」

後頭部に冷たいものが押し付けられるひんやりとした感触、条件反射的に私は両手を挙げた。それを見て少年は身を起して動きを止めた。

「そうだ、そのまま動くんじゃねぇ…動くなよ！」

男は私を羽交い締めにして、さらに銃口を私に押し付けた。その手が震えている…私はここで、初めて本当に怖いと思った。本当に殺される、とそう思った。「助けて」言おうとして声が出ない。涙も出ない。

少年はじっと視線だけで彼を射抜いていたが、動く気配はない。ただ、そのまま事の成り行きを見守ろうといったような風だった。私は少しそれに腹が立った。いや、散々助けてもらっておいて、しかも今だって私の所為で動けないのは分かっているけれど、それでも何とかしてくれたっていいじゃない、そう思った。

「…ちょっと、何とかし…」

堪りかねて言いかけたその時だ。急に男が低く呻いて、倒れた。あれ？驚いて振り向くと、背の高い中年の、白髪交じりの男がいつの間にか立っていた。首に手刀でも打ち込んだのだろうか、眠そうに欠伸をしながら手を振っていた。

「あの、ありがとうご…」

二人に対して言いかけたが…。

「…減点。」

「…うるさい。」

「この位の手相一瞬で蹴散らせよ？」

「…ならご自分でされてはいかがですか？」

「面倒臭ぇ。ああ、なんか目が冴えてしまった。」

まるでこちらの事を無視したように2人は会話を続けている。

「あの…あの！」

私はついつい声を荒げて二人の会話に割って入った。二人はそこで始めて私の存在に気付いたかのように振り向いた。私も、そこで始めて二人の顔をしっかりと見る。

一人は、中年の背の高い男性、前髪が額の中央で分かれていてその根元が立ち上がっている。相当硬そうで量のある白髪交じりのその髪を背中に長く垂らして一つに纏めている。目元は切れ長で、良く言えば涼やかといった所か…。その色は珍しい紫だ。鼻が高い所以外はコレといって特徴は無い。ただ着ている服は珍妙な物だった。おそらくはどこかの地方の民族衣装なのだろう。

もう一人、そう先程助けてくれた少年の方はというと、これは…思わず息を呑むほどの外見で、ちょっとこの世のものとは思えないような美しさだった。背はどちらかというと小さい方、長い銀色の髪を一つに纏め、同じく長く伸ばした前髪で左目は隠れている。右目は吸い込まれるような深い藍、肌は抜けるように白く滑らかで、手足はほっそりと長い。グレーのトレンチに襟ぐりの大きく開いた黒いシャツを着ていた。

二人から一斉に視線を投げかけられて、呼び止めたは良いものの、なんだかドギマギしてしまう。

「ああ、ええっと、大丈夫だった？　怪我は無い？」

中年の方が気を利かせて言ってくれて、私は何とか頷いた。少年は

じっと私を見ている…緊張するのでやめて欲しい。

「女の子一人では危ないから、送りましょうか？」

中年の方が手を差し伸べてくれた。いえ、そこまでは…と言いつつ、結局、送ってもらう事になる。彼と私が並んで歩いて、その後ろから少年が付いて歩いた。私と男性は道すがらポツリポツリと会話をはじめた。

「本当にありがとうございました。何かお礼でも…。」

「あぁ、いえいえお構いなく…まぁ、こうして街に出られた方が私たちも暖かい布団で眠れるわけですし…。」

「はぁ。旅をされてらっしゃるのですか？」

「まぁ、見聞を広めようと思いまして。」

そう言って、彼はちらりと後ろの少年を見た。親子…ではないだろう（どう見たって外見が似ていない。）どういう関係性なのかはよく解らなかったが、この男性が少年の保護者と見て間違いはないだろう。虫が引切り無しに鳴いている。少年はじっと後ろから私たち二人を見ていた。ちょっと気まずくなって、再び男性に話しかける。

「あの…私はフランといいます。この峠を越えた所の、小さな集落に住んでます…あの…」

「フランちゃん？　可愛い名前だね。似合ってる。…あ、ええと、アレは無口で無愛想だが、まぁ許してやってくれ。俺は…泉瑞月。」

「チ……？　ク…ウェ？」

「あぁ～発音が難しい。師父とでも呼んでくれ。後ろのはそうやって言っている。で、コイツは…。」

「…好きにしろ。」

中年…師父さんが言いかけた時、ぼそりと少年が口を開いた。

「え？」

「好きに呼べばいい。勝手にしろ。」

少年はそう言ってじっと私を見た。私の隣では師父さんが額に手を当てて溜息を付いていた。「…本当にお前は…。何でそう…。」と、ぼやいている。名前が無い…とは思えないが、常識的に考えて。ただ、もしかしたらその名を呼ばれるのが嫌いなのかもしれない、それともただの反抗期かしら？　そう思うと、その無愛想な少年が、それはそれで可愛気がある様に見えてきた。

「じゃぁ…そうね。私はあなたを”ウィアド”と呼ぶわ。」

「…。」

「昔の言葉で”空白”って意味なのよ。いいわよね？　なんでも良いんでしょう。」

「構わない。」

彼はそれだけ、言葉短く告げてそっぽを向いてしまった。気に入らなかったのだろうか…まぁ、そうかもしれないけども。それなら勝手にしろなんて言わなければいいのだ。

「あ、集落に着いたんじゃないか？」

師父さんが腰に手をあてて一息吐きながら言った。木々が切り倒されて開けた所に集落はあった。薄暗い明かりが粗末な木造造りの家々から漏れて零れている。その家々の向こう側には山間を切り開いた段々の畑が広がっていて、ただこちらはもう本当に明かりが無いため、この時間この位置からは見えなかったが。ああ、我ながら思

うけれど、本当に貧しい小さな集落だ。

「…ここって、どこか宿って、あるの？」

師父さんが少し頬をひきつらせながら怪訝そうに聞いてきた。それは、確かにこんな様子を見せられちゃぁそう思ってしまっても仕方が無いのかもしれないけれど、でもあんまりにもそれは馬鹿にし過ぎだと思って、私はちょっと拗ねた。

「…見くびらないでくださいよ！　小さな集落ですけれど…。」

とぼとぼと三人で歩く。集落のメインストリートは…とは言っても店などとうに閉まっていて、酷く寂しい様子だったのだが、街灯すらないその道をしばらく進み、金物工のある角を曲がる。その道だけは少し明るくて、まだ営業している店が2軒あった。入口のランタンが橙に揺らめいている。

「ここで、いいです。」

私はそのうちの一軒の前で立ち止まって振り返った。

「ありがとうございました。ここが私の家ですから！」

私は二人に対して恭しく頭を下げた。そうして左手で家の扉を指して更に言った。

「ようこそ、ディエン村へ。そうしてここが、この集落で唯一の宿です！」

「あ、すいませ…」

私の必要以上の笑みに対して、師父さんが、ちょっと引いて慌てて謝った。

Then 2 years later（後書き）

少し長めですが、出だしなので。

よろしければご意見ご感想等お聞かせ下さい。

今後の活動の参考とさせていただきたく思います。

2（前書き）

荒削りですが。取り敢えずＵＰします。
本編から来た方へ。コレがセラナとウィアドの出会い編になります。

2

古びた木の扉を開ける。暖かいオレンジの光、スープのいい匂いがする。私は嬉しくなって駆けて入った。

「ただいま！」

「こんな遅くまでどこほっつき歩いてたんだいこの不良娘！」

鼓膜が痺れるほどの怒鳴り声がして、母さんがおたまを片手にしかめっ面で飛び出してきた。いつもならふて腐れる所だけれど、今日はなんだかそんなお母さんを見たら、嬉しくて、安心で、気付いたら駆け寄って抱きついて泣いていた。

「どうしたの。何があったのフラン？」

母さんが私の顔を覗き込んで言った。私は今日、さっきあったことを全部曝け出していた。母さんは、「だから日が暮れる前にって言ったでしょ。」と言いながら、それでも私を抱きしめてくれた。暖かい、家の匂い。

「で、後ろの二人は、なんだい？」

母さんが私の背後を指差して言った。私はそこで始めて我に帰った。多分、私の背後で二人はきっと、その様子を生温い目で見ていたに違いない。（ええ、絶対にそう！）師父さんが手を振りながら答える。

「あぁ、すみません、怪しいものではないですよ？」

「怪しいよ。」

母さん、そんな即答しなくても……。まぁ、彼の衣装は相当怪しいけれども。

「違うのよ、母さん、この人たちは……―。」

私が言いかけた時、すっと、彼の背後から一歩前に少年が出た。一瞬、それまで疑心暗鬼だった母が、絶句するのが解った。

「宿を、お借りしたいのですが。」

少年、ウィアドが言うと、母さんは、「こんな時期に珍しいわね。」と言いながらもどこか嬉しそうに支度を始めた。母さん、露骨に見た目で人を判断して。まぁ、気持ちは解らなくもないけれど。

「ここに名前を書いて頂戴。二人連れよね？　同じ部屋でいいのかしら。」

「一緒で。」

「別で。」

二人は同時に言って、すぐに師父さんが嫌そうな顔をする。少年はそんな彼を無視して台帳にスラスラと几帳面な字を書いていた。そんな彼を目の端で見ながら師父さんは咳払いを一つして彼に言う。

「……いや、同じでいいじゃないか。お金勿体無いし。」

「煩いから嫌です。それにお金には困ってません。みっともないのでそういう事を人様の前で言わないでいただけますか？」

外見によらずこの少年は毒舌らしい。師父さんは困ったように前髪

をかきあげながら、更に彼に食って掛かる。あぁ、何かこの感じは……また周囲を度外視して会話をする気なんじゃないだろうか？

「お前なぁ、すべての物には限りって物があって、価値を知って大切に使わないと。」

「精神衛生上、良くないと思いまして。」

「何でだ？　いつも野宿してんだろうが。」

「それ自体賛成しかねるプランですね。」

「貴様、師に向かってなんだその態度は……。表ぇ出ろ！」

「兼摂的ではないですね、お生憎様外はもう暗いですし明日に持ち越しませんか？　それに私は外に出るのはかまいませんが、ここの宿代、生活費一切合財私が取り仕切っているのに、その私を追い出すこと自体、無意味・荒唐無稽・本末転倒ですね、ああ、一番しっくりくる言葉がわかりました。意味不明、ですね。」

一気に、息継ぎ無しでそこまで言い放つと、少年は、母さんから部屋のキーを半ば強引に受け取って、階段を上がっていった。数段昇った所で一度振り向くと思い切りそのうちの一本を師父さんに向かって投げつけた。

めしっ。

鈍い音を立てて鍵は彼の後頭部にヒットした。

「…―いやぁ、反抗期なもので、手が掛かって困りますよ、はは、ははは。」

頭を摩りながら満面の笑みで彼はそう言った。（でも絶対怒ってる、

絶対！）お母さんは「男の子はアレくらいが元気があってちょうどいいわよ。」なんて言っている。

「あの、夕飯はいかがいたしましょうか？」

私は訊いた。そりゃぁまあ、一応宿屋の娘としてここで手伝いもしているもの。それに、助けて貰った手前、何かできる事は無いかと思ったからだ。

「いや、夕飯は済んでるから……。それより一つ聞きたいんだけど、ここって風呂って。」

「この土地は温泉でちょっと有名でね。」

その台詞は母さんが受けて答えた。

「冬になると結構こんな寂れた集落でも人は来るんだよ。だから、うちも当然、源泉掛け流しの大浴場さ。それだけが自慢だからねぇ。」

それを聞いた彼はちょっと黙って口元に手をあてるようにして何かを考え込んでいた。が、次の瞬間彼の口から出た言葉はその真剣な表情とはあまりにも掛離れたものだった。

「もしかして混浴？」

「んなわけあるか！」

あ……、ついついお客様なのに蹴っ飛ばしてしまった。ああ、なるほど。こういうことか…―。なんだかちょっとウィアドの反抗したくなる気持ちが理解できた気がした。

2（後書き）

よろしければご意見ご感想お聞かせ下さい。
今後の活動の参考とさせていただくべく、作者が伊達正宗のコスをしながら選挙戦の特番に出演し、「ずんだ、ずずんずんだ、牛タン、タタン、タンタタンタン」とノリノリで歌います。

3（前書き）

元々を携帯で執筆していたので手直しに手間が掛ってますが…。まだまだ改稿の余地有りですねぇ。まぁ会話を楽しんでいただけたのならば本望。モットーは「軽く流して読んでもらえる物」です。

3

「おはよう母さん」

朝、一階部分の食堂に降りると、既に母さんが朝ごはんの準備をしていた。私は古い木製の大きなテーブルを布巾で拭いて食器を運ぶ。それから、母さんがブロックのベーコンをスライスしているのを見て、裏庭の鶏ゲージから、卵を獲って来る。卵とベーコンの焼けるいい匂い。バターとチーズを切り分けて、甕から水を汲んで置く。

こんな豪華な朝ごはんは久しぶりだ。冬場ならお客さんも多いので毎日だけれど、こんな時期に食べられるのは珍しい。

「お二階のお客さんを起こしといで。」

母さんが言って、私は階段を駆け上がる。早い時間だけど、もう起きているかしら？　部屋の前で立ち止まる。こっちは師父さんの部屋かな？　扉は薄ら開いており、中からは話し声が聞こえた。起きてるみたい、そっと中を覗いてみる。

お世辞にも、広いとも奇麗とも言えない部屋を、カーテンの隙間から緑色の朝日が斜めに切り取っていた。その切り取られた絵の中で、鏡台にウィアドが腰を掛けている。師父さんが、櫛を片手にウィアドの長い髪を梳いていた。その髪を器用に上の方で一つに纏め上げていく。彼の手の中で、光を浴びた銀色の髪が動きに合わせて煌いていた。白くて細い首筋が露になる。まるで少女のように華奢なそれはほんのりと赤みを帯びていて羨ましい位に奇麗だった。

「まだか？」
「まだ駄目、もう少し待て。」
「適当でいい。」
「いや、駄目だ駄目。後れ毛が出るだろ、あ、お前、動くなたわむ。」

口に咥えた紅い紐を髪を持っている左手の指で挟むと、右手で機用にクルクルと髪に巻きつけて、最後に紐の端と端を結び合わせて止めた。ウィアドは手で髪を気にして触っていたが、満足したのか椅子から立ち上がって頭を軽く振った。その様子を櫛を布で包みながら師父さんが優しげに見守っていた。……って、この二人、昨日喧嘩してなかったっけ？　仲良いじゃない。その様子をぼんやりと眺めていると、急に扉が開いた。扉に体重を掛けていたので思わず前のめりに倒れそうになる。

「……―。」

振り返ると、ウィアドが立っていた。眼の端で私を見下ろしている。

「可愛いお嬢さんが、覗きとはいただけないなぁ。」
「ち、違います！朝ごはんが出来たので！」

笑いながら言う師父さんに、私はスカートを払いながら反論する。多分最初から気付かれていたんだろう、思わず顔が火照るのが解った。この人は、意地が悪い。気に障ったのだろうか、ウィアドが少し不機嫌そうに眼を逸らした。

「ベーコンエッグと、サラダとパンと、チーズ…しかないですけど。」
「……。」

私が付け加えてそれを告げると、ウィアドは赤面する私の傍らを通り過ぎ、思い切り扉を力任せに閉め、部屋を出て行った。…一怒らせてしまったかしら。でも階段を降りる足音が聞こえて、彼が食堂に向かうのが分って少し安堵する。

「何だか、アイツ不機嫌だな、いつもだけど。気にしないで、多分悪気は無いし怒ってもいないと思うから。」

師父さんが私を気遣って言い、そうして彼の後を追って階段を降りて行った。

＊＊＊

「ご馳走様です。」

私は言って目の前に座っているウィアドを見た。彼は未だにパンを齧っている……いやなんて言うか、それまだ一つ目だよね？　おかずもまだ半分以上残っているし。

師父さんはとっくに食べ終えて本を読んでいる、母さんも既に後片付けを終えてお茶の用意をしていた。私も食べるのは遅い方だが、ここまで遅いと絶望的だ。女の子ならまだしも男でこれは……。トウモロコシのパンだから食べづらいのかしら？

「もう、こっちの皿は片付けちまっていいかい？」

母さんが痺を切らして言う。

「構わないですよー。すみません、そいつ、食道細くて…それでも今日はよく食べてる方ですよ。」

師父さんが活字から目を放さずに言った。

「旅とかされていると、普段は何を食べているんですか？」

「うーん、乾パンとか干し肉とか干し魚とか？あと蛙とか。あと茸とか木の皮、最悪だと霞。」

「…―。」

「でもコイツこんなんでしょ、殆んど食べなくてね～。」

「だから小さいんじゃないですか？」

「かもね。」

たわいもない会話をしていると母さんが紅茶を運んできた。

「男の子なんだから、もっと沢山お食べよ？　でないと大きく成れないよ？」

ウィアドは無言で一口パンを齧った。何か……一生懸命だ。食べたその先から食べた分のカロリーを消費している感じだ。その証拠に彼は一つ溜め息を吐くと、懐から一枚紙を取り出して、ベーコンとチーズを挟んだ食べかけのパンを几帳面に包んだ。

「もういらないの？」

「いや、疲れた。後で食べる。」

「…―。」

っなんて可愛らしい事を！

3（後書き）

よろしければご意見ご感想をお聞かせ下さい。
作者が嬉しさのあまりバニーボーイの格好で「ようこそ、バニーボーイの店、ラ・ビリンス、下・高井戸店へ。」と珍妙な接客を展開します。

4（前書き）

お久しぶりでございます！！
やっとこさ本編の方に師父が出てきましたＹＯ。

4

「さて、そろそろ行くか。」

読んでいた本をパタリと閉じて師父さんが言った。セラナは無言だが視線だけで頷くと椅子を飛び下りて背もたれに掛けてあった鞄を肩に掛けた。

「もぅ、行っちゃうんですか？」

まぁ、此処から隣町までは日の高いうちに出ないと間に合わないけど、なんだか少し寂しい。

「二人で一泊朝食付きで１４６だよ。」

母さんが前掛けで手を拭きながら言った。

「えっ。母さんお金取るの？　私助けてもらったのに？」

「それとこれとは話が別だよ。慈善事業じゃああるまいし。」

「それはそうかもしれないけれど……。」

私は思わず母さんの言葉に頬を膨らませた。母さんのこういう所、良くないと思うな、まぁ、生活が掛っているんだもの仕方が無いのかもしれないけれど。

「構わない。」

ウィアドが言って、さも当然のように黒い小さな手のひら大のカードを取り出した。

「一括で。」

……私も母さんも、彼の言葉の意味が解らず黙った。すると彼は傍らで少し引いたような冷たい視線で成り行きを見守っていた師父さんに手を出しながら言った。

「クレジットが使えない。」
「……だろうなぁ。」
「キャッシュを寄越せ。」
「無いよ？」
「……は？」
「だから、無いものは無い。」
「……き、貴様と言う奴はぁぁ！」

その言葉に、ウィアドが柄に似合わず声を震わせる。

「何でだ、何故だ！つい最近貴様に渡した５００…酒か？　女か？　ギャンブルか！？　血税だぞ？　その金は……。」
「馬鹿かお前は、お前は馬鹿か！飲食、衣類、交通税、書籍代その他諸々二人分で５００で足りるか？！　だから金が無いから一部屋って言ったろう？」
「……書籍代は余分だ。因みに今幾らあるんだ？」
「９２弗……。だから一部屋と……―。」
「……。」
「お二人さん、言い争いは良いんだけれども、で、どうするんだい？」

母さんが凄む。そのは相変わらず堪えない接客スマイルだが、声が低くドスが効いている。

「お……女将、まけてくんない？」
「びた一文まかんないよ！　ってかこれでもまけてるんだけどねぇ？」

師父さんと母さんが笑顔で応酬している。その時、ウィアドが言った。

「おろしてくればいい。フラン、一番近くの銀行はどこにある？」
「この集落には無いわ。隣町を更に超えたちょっと大きな街まで行かないと。」
「そうか。ならば、金を取ってこよう。そいつは……質として置いていく。」
「駄目！」

一人でさっさと外に出て行こうとする彼の襟首を捕まえて師父さんが言う。

「絶対、駄目。」
「……。」
「そうだよねぇ。こんなオジさんには質の価値はないわねぇ。」
「そうそう。」

母さんと、師父さんの意見が始めて合う。……師父さん、言っていて自分で悲しくならないのだろうか？

「俺がおろしてくるから、お前はココに残ってろ。」
「でも。」
「あ、コイツの事はもぅ好きなだけ扱使って良いんで！　いいから、カード寄こせ。」

師父さんは、半ば強引にウィアドの手からカードを奪い取ると、「じゃぁ、そういう事で！」と手を振ってそそくさと、玄関を出て行く。その背中に向かって、ウィアドが声を張り上げる。

「いいか！　余分なものに使うなよ！　絶対だ、絶対！！」

急に、部屋の中が静まり返ったように感じた。キラキラと朝の光が窓から差し込んでくる。そうだ…いつも朝って、こんな感じだった。私は玄関の前に立ち尽くすウィアドを見た。彼は呆然と、師父さんの去った方角を見ていた。

「寂しいの？」

「……っ！まさか、清々している。」

セラナは腕を組んで冷たく言い放っていたが、何だかその様子が酷く強がっているように見えて、ちょっと可笑しくて、思わず笑った。ウィアドはそう言う私の態度が気に食わなかったのだろう。怪訝そうに眉を顰めた。まったりと時間が過ぎていく。コトコトというスープの鍋の煮立つ音、古めかしい柱時計の針の音、裏庭の鶏の鳴き声……まるでそれまでが全て嘘だったかのように急激に、騒がしかった食堂は彼らがやってくる前の「日常」の空間に支配されて行く。ただ一人、ウィアドを残して。

彼はくるりと玄関に背を向けて先程まで師父さんが座っていたソファーに腰を掛けた。仰け反って天井を仰ぎ眼を閉じる彼の、銀髪の光が揺れる。閉じられた瞳を縁取る長い睫が白い頬に影を落とし、伸ばされた、ほんのりと赤みを帯びた首筋。まるで物語の中の妖精のような、深窓のお姫様のような少年に思わず見とれていた。ぼん

やりと立っている私に母さんがお勝手に戻りながら言った。
「そうだ、フラン、水を汲んできておくれ。」
「えぇ？！」
水……そういえば、甕の残りが少なかった。けれども……。
「お母さん、たまには兄さんに言ってよ。」
私は言って口を尖らせる。水汲み、私の一番嫌いな仕事。だって、水の取れる井戸までは、凄く遠いし、それって本当は男の仕事だもの。桶を天秤に掛けて担いで歩くのは結構な重労働だ。
「兄がいるのか？」
ウィアドが訊いた。
「そう、でも部屋にずっと篭滅多に出てこないのよ。」
私は言って溜息を吐いた。しぶしぶと、桶を担ぐ。家に戻れるのは昼かなぁ、そう思うと哀しくなる。
「ココには水道が無いのか？　温泉はあるのに？」
「そうよ。というかこの辺りで真水が出るところなんて少ないの。ココの温泉は硫黄が濃くて、飲み水には出来ないもの。」
「源泉から硫黄の成分を抜けばよいのでは？」
ウィアドはさも当然のようにさらりと言った。私は彼の態度が少し気に入らない。そんな事が出来るのは大きくて豊かな街だ。こんな小さな貧しい村である筈の無い物を当たり前のように言うのはやは

り少しいただけない態度と言う物だ。

「そんなこと、できるわけ無いでしょ。浄水施設があるわけでもないし。」

「……？いや、そんな物無くても……―。」

ウィアドがきょとんとした顔で私を見た。

「じゃぁ、やってみてよ。」

私は更に小馬鹿にされているような気がして頭に来て言った。まさか、そんなこと、普通に出来るはずが無い。それとも何か、そういう、何か分解できるようなな薬とかを持っているのかしら、この子は…そう思いながら横目でウィアドを見ると…

「え？　……ええ？！」

「……水だ。」

４（後書き）

よろしければご意見ご感想をお聞かせ下さい。筆者が狂喜乱舞のあまり「翼手は…斬る！」と刀を抜き放ち、ハジの援護→ＭＡＸＣＯＭＢＯで「翼手」を斬り倒しましょう！さすれば１０Ｒ以上は確定です。…しかし、１Ｒの出玉数が多い気がするの。Ｂｌｏｏｄ＋

5（前書き）

すっごい間が空いてしまいましたが、
思い出したように更新しました。

5

彼の掌の上には、球体の、水が宙に浮いていた。それは揺れながら徐々に体積を増していく。

「な、な、何それ！！」

「水……だが？」

私の問いにウィアドはあっさりと答える。っていうか、そう言う事を聞いてるんじゃなくて、どうして水が宙に突然湧いて出てきたのかを聞きたいのであって。

「あ……すまない。うまく調節が……――。」

彼が再び声を上げて、私はそちらを見た。掌の上で球状になり宙に浮いていた水の玉が、軋む様な音をたてて白くなったかと思うと、次の瞬間……。

「きゃぁ！」

勢いよく粉々に砕け散った。破片が太陽の光を跳ね返してキラキラと光っている。しかしそれは一瞬の事で、それらはすぐに硬さを失って床に染み込んで行った。

「……もしかして、魔法？」

魔法……と正式にそう言うのかは知らないけれど、噂には聞いた事がある。何でも色々な奇跡を起こせる人達がこの世界にはいるらし

いって事。因みに、私達の住んでいるアルディアナ大陸には殆ど居ないらしいんだけれど、その他の国とか地域には結構そういう人達がいるらしい。

「魔法……解り易くていいネーミングだ。」

ウィアドはちょっと笑って振り向いた。その笑顔に不覚にもドキリとしてしまう。年下なのに。

「手伝い位、せねばだろう？」
「何が？」
「あのボンクラが戻ってくるまでは実質、働き手としてここに居る様なものだしな。」
「そんなの、気にしなくても……。」
「水が必要なのだろう？　手伝おう。だが、この土地では魔素濃度が薄い。空中での精製は難しいな、もっと労力の掛らない方法ならば可能だな、例えば……そう……。」

そう一人呟いてウィアドは奥の廊下の方に歩いて行き、少しして踵を返して戻ってきた。

「桶を持って行こう。」
「桶？」
「水汲み用の……。」
「でも、何に使うの？」

彼は無言で桶を担ぐと、先ほど行った廊下を今度は真直ぐに突き当りまで歩いた。そこにあるのは、当宿自慢の温泉で、彼は躊躇無く女湯の方に入って行く。

確かにこの時間に人は誰も居ないけど、ちょっと位戸惑った方が可愛げがあるってものだが……。

それから彼は、温泉から桶に水を汲んだ。そうしてその前にしゃがみ込み、水に指を触れた。すると……。

「綺麗！」

その瞬間桶の水面には白い花のような結晶が一面に咲いた。卯の花だ。それを手で掻き出すと、ウィアドは桶を持ち上げようとした。しかし、重たいのかかなりフラフラしている……。

「手伝おうか？」

「……。」

言って私は運ぶのに手を貸した。どうやら彼はあまり力が無いらしい。あれだけ華麗に山賊を張り倒していたのが嘘の様だ。

桶の中の水を、濾過する網が付いた甕に注ぎ込む。網にはまだ少し、取り切れていなかった卯の花が残った。その網を取ってウィアドは柄杓で水を掬い一口、口に含んだ。そうして柄杓の柄を私に向けて、勧めてくれる。私は恐る恐る一口、それを口に含んだ。

ああ、硫黄の匂いもない。普通の水だ。何だかいつも飲む水よりも、気持ち苦い様な気もしたけれど、問題は無いらしい。

そうやって、何往復かした頃、甕の中は水で一杯になった。時計を見ると一時間位過ぎた所だろうか？

「助かったわ！ありがとう！！」

私はセラナの手を取って言った。一瞬彼はきょとんとしたが、ちょっと頬を赤らめて俯いた。

……何この子、可愛いんですけど。

「こら、フラン！水汲みはどうしたんだい！！」

母さんの声がした。

「もぅ、やったもん、ねぇ～！」

私はウィアドを見てその声に返事を返すと、彼の手を引いた。

「行きましょう！集落を、案内するわ！」

＊＊＊

小さな集落ではあるが、日の高いこの時間帯はそれなりに賑わう。特に今日は市の立つ日とあってメインの通りには小さな屋台がひしめき合っている。屋台と言っても立派な物では無い。地べたに敷物を敷いてその上に品物を並べただけのものだ。彼等は各地の市をめぐっている行商人達なのだ。地味な街道が色とりどりに染まるこの日が私は大好きだった。

「ほう、市がたつのか……。」

「そうよ！　月に一回だけどね。」

ウィアドも物珍しそうにきょろきょろと往来を見ている。やっぱり彼も年相応の感性を持っているのだろう。

「こんな寂れた場所にも商売があるとは。」

「あるわ、そりゃぁあるわよ。」

「こういう寂れた集落は自給自足だと思っていた。」

「殴るわよ？」

少し、彼を子供と思った私が馬鹿だった、と思わず溜息を漏らしたその時、彼が急に立ち止った。

「何？」

「……。」

彼は問う私に対して一瞥もくれず、ただ前方を真っ直ぐに見つめていた。彼の視線の先を探り当てる、そこには多くの人に取り囲まれた男性が一人居た。

ピンクブラウンの髪にヘーゼルの瞳で甘ったるい笑みを振りまいている背の高い男性、彼の周りの老若男女は彼に対して会釈をし、それに彼も答えて手を振ったりしている。白い糊の効いたシャツに紋章の入ったマントを肩に引っかけている。

「ああ、彼が気になるの？」

ウィアドに問いかける。彼は人差し指を咥えたままじっと男性を見つめていた。眉間に皺が寄っている。

「彼はね、この村の領主さまよ。カッコいいわよねぇ……ほら、この村って水が貴重じゃない？　だから水をめぐって争いが絶えなか

ったんだけど、彼が領主様になってから、全ての村人に均等に水を汲む権利が割り与えられるようになってね。だから彼は若いけど良い領主さまなの。」

私の話を聞いているのか居ないのか、ウィアドは熱視線を送ったままで小首を傾げ言う。

「……あれは……人？」

「あれって？？」

「いや……。」

流石の領主さまもこれだけ視線を送られれば気付くだろう……こちらを振り向いた。そうしてその視線がウィアドと交錯する……瞬間、一瞬、本当に一瞬だけど、彼の笑みが凍りついた、ような気がした。そして、再び柔和な笑みを湛え、こちらに向かって歩み寄ってくるではないか。

「……。」

彼が近づいてくるとウィアドが一歩二歩と後退り、私の背に隠れた。

え！　そんな、隠れられても、っていうか私どうすればいいのちょっと！

領主さまを目の前にして、私は緊張しながら頭を垂れる。

「こ……こんにちは！」

何を言ってるんだよ私、と心中自分で自分に突っ込みを入れる。こんにちはって……領主さまにこんにちわって……失礼じゃないのか

？　でもこんにちわに敬語ってあったっけ？

焦る私とは対照的に領主さまはにっこりとほほ笑んで

「こんにちは。」

と返してくださったではないか！　やはり彼は良い領主さまなんだろう。この村の誇りだわ！　舞い上がっていると領主さまは私の背後に佇む彼に視線を向けて首を傾げる。

「キミは……この辺りの子じゃないよね？」

「あ、はい。彼は私の家……あ、旅館なんですけど、の宿泊者で……。」

「へぇ、こんな年齢で旅とは大変だね。」

領主さまの言葉に何も反応を見せず、ウィアドはただ黙って彼の脇をすり抜けてすたすたと歩いて行くではないか！

「ちょ……ちょっと待って！　す……すみません。」

なんたる失礼なんだろう！　もぅ、嫌になる。私はウィアドに駆け寄る。

「待ってってば！」

彼の肩を掴んで振り向かせた。長く煌めく銀の髪が大きく揺れる。

「今のは失礼でしょ！」

私が言うと彼は少し困ったような表情を浮かべてそして言う。

「あの領主……。」
「え？」
「いや、何でも無い。」
ウィアドはふらりと何か考え込む様に歩いて行く。気付けば白磁の肌は更に血の気を失って、今は寧ろ青ざめている。
「大丈夫？」
問いかける私にこくりと頷くとウィアドは私の家の方に向かってそのまま歩いて行った。

＊＊＊

「まさか……こんな所で会えるとは、ね？」
薄暗い、岩肌が剥き出しになったその部屋に彼はいた。壁にそって並べられたワインボトルの内の一本を手に取ると手慣れた手つきでコルクを抜いた。そうしてワイングラスに紅色の液体を注ぐ。それを掌の上で回し、そうして口にほんの僅か、含む。
「お兄様、コレをどうぞ。」
「山羊のチーズでございます。」
女が二人彼の元に歩み寄る。彼女たちの容姿は瓜二つだ。髪を二つ分けに結い、給仕の格好をしている。

「ああ、ありがとう。」

男は言って、チーズを一切れ頬張る。

「御機嫌ですね。」

「何か良い事でも？」

彼女達が言うと彼はふふん、と鼻で笑う。ヘーゼルの瞳が薄暗がりに光った。

「ああ、喜べ妹よ。我らが敵が向こうからやってきたようだ。」

5（後書き）

メラメラメラメラブハート！
突撃しちゃうような古臭いギャグがたまらねぇよ閻魔君。
雪女ちゃんふぉーりんラブ。雪ちゃんが悩殺してくれるｗｗ
つか公式が病気。こういうエロはいいよね。
でも俺の一押しは花咲くだぜ？　あとＣはキャラデザがなんか慣れない。
でもモノノ怪の監督だからがんばってみる。

6

＊＊＊

「もぅ、ウィアド、ウィアドったら！」

無言で黙々と家の掃除を続けるウィアドについつい痺れを切らして声を荒げてしまった。まぁ、確かに……ウィアドは良く働いた。あの口うるさい母さんが何も言わずににこにことしてお茶を飲んでいられるほどに、だ。手慣れた様子で雑巾を絞り隅から隅まで、それこそ徹底的に。まぁ、元々潔癖なのかもしれないけれど……けれどもあれからずっと彼は無言なのだ。そりゃぁ私だって怒りたくもなる。

「ねぇぇ、ウィアドったら、何を……―。」

怒っているの？　とそう聞き掛けた時、がつんっと音がして、私の目の前を歩いていたウィアドがよろめくのが見えた。彼の歩いていたすぐ脇の扉が急に開いた為、それにぶつかったのだ。

「ありゃりゃ、大丈夫？」

尻もちをついたウィアドを支える。……うん、男のくせに羨ましい位華奢な肩だこと、おまけになんか良い匂いがする、って、そんな事はどうでもよくて。

「ちょっと！　お兄ちゃん、謝って！！」

私は扉をいきなり開けた人物に向かって声をあげた。

扉の隙間からのっそりと顔を覗かせた彼は紛れもない私の兄で……長く伸びた髪はボサボサ、薄い髭がみっともなく伸びている。よれよれのくたびれたシャツは汚れていて、瞳は濁っている。って、自分の兄を形容したときにこんな言い様はないんだろうけど、でも事実なんだから仕方が無い。

「……うるさいんだ、さっきから。思考の邪魔だ。」

「思考って、何が！！　ただひきこもってるだけじゃない！！」

そうなのだ。この兄……いや兄とも思いたくないんだけど。

「……誰。」

私の非難もさらりと受け流して兄……ナハトはぼそりと呟いた。

「ウィアドよ！」

「ウィアド？」

「お客さん！！」

「……あぁ。」

気の無い返事をし、兄は再び部屋に引っ込んでしまった。

「ごめんね、大丈夫？」

私はウィアドに声をかける。

「……大丈夫だ。」

鼻を押さえながら言うウィアドの声は少し震えていて、ちょっと泣きそうなんだろうか。そう思うと、やっぱり憎たらしくそして可愛い、可愛い。

そのままよろよろとしながら雑巾片手に階段を降りて行く。確かに、兄の部屋は二階の最奥だから……掃除は終わりと言う事か。ふらふらとしているウィアドに向かって私は声をかけた。

「あ、ねぇ、もう雑巾がけ、終わりでしょ？　一休み、しない？」

＊＊＊

「兄、なんだけどねぇ。」

マグカップに入れたダージリン、木苺のジャムを一匙おとしてミルクをたっぷり注いで、それを木匙でかき混ぜながら私は呟いた。ウィアドは猫舌なのか、しきりに息を吹きかけている。話を聞いているのかいないのか……。

「ああなっちゃったのはつい最近なの。」

紅茶を一口啜る。仄かな甘みと酸味が鼻腔をすり抜けていく。ウィアドのおでこと鼻先は真っ赤に腫れていた。それが少し照れているみたいで、ちょっと鼻白んだけど。

「それまでは普通にいいお兄ちゃんだったの。ほんと、良いお兄ちゃん。料理が上手でさぁ……家のちょっとした名物になるくらいに

さぁ、特にね、鴨のローストが最高で。マーマレードとマスタード、それからホワイトペッパーを効かせたピリッとしたソースが絶妙で……家には父さんいないから、だから、なんかさ。うん大好きだったんだけど……。」

あ、ウィアドが紅茶を拭きだした……。やっぱりこういうのって変だったのかな？　ええい、気にせず勧めてやる！！

「でもねちょっとまえからあんな感じでひきこもっちゃって。」

「……。」

「うん、お兄ちゃんにはね、フィアンセが居たんだけど。」

「はぁ？　フィアンセ？！　それでは……。いや、何でも無い。」

？？？　赤くなっているのかな、元々赤いのか……。気付かない振りをして私は続けた。

「ひきこもった理由ってのがまた変でさあ……。なんかねその人が、あ、フィアンセさん……ミエさんっていうんだけど……領主さまの所で給仕さんをしててね。で、その人が領主さまに心変わりしたって言ってさぁ、そんなこと、ありえなくはないけど。でもね、自分のことすっぱり忘れてる、しかも二人に増えてるっていうんだもん。変だと思わない？」

「……。」

ウィアドは神妙な面持ちで紅茶を啜っていた。何か思う所があるのだろうか。

「まぁ、お兄ちゃんの思いこみなのか何なのか良く解らないんだけどね。だから、ちょっと変なのよ。お兄ちゃん。ホントごめんね。」

ため息交じりに言うと彼はそっぽを向いてしまった。その面持ちは少し重い。私は何か変な事を話してしまっただろうか。空気の重さに耐えきれず違う話題を探す。

「そう言えば、ウィアドって好きな人がいたりするの？」

その私の言葉にウィアドは盛大に吹いて、そして突っ伏したのだった。

＊＊＊

夜御飯も終わって、今日もお客さんはいない。まぁ正確にいえばウィアドがそうなんだけど、でも今は家の作業とかも手伝ってもらってるから正確に客かといえばそうでもない訳で……。食後一時間くらいたってから私は浴場に向かった。

この家に生まれて唯一良かったと思えるのが温泉に毎日つかれる事であろう。

服を脱いで葦で編んだかごに放り込む。カラカラ、と引き戸を引いた。湯気が煙ってそれ自体がサウナの様だ。私は蛇口をひねってお湯を出し、盥に一杯のお湯をかぶる。そうして湯船に足を進めて……違和感に気付いた。

音がするのだ。微かな水の揺れる音。湯気に目を凝らすと人影らしきものが見える。

母さん？

いやいやいやいや、母さんはキッチンでワインを一杯ひっかけていたから母さんではないだろう。では、誰？　私は桶を胸の前に翳してそぅっと湯船に歩み寄る。岩で作られた湯船の輪郭がはっきりと見えた。そっとお湯をくみ私は身構える。絶対に誰かいる……気配が、する。

お湯の揺れる音それからため息交じりの呼気……。そのシルエットに向かって、私は言った。

「誰よ！　そこにいるのは！！！」

「！！！！」

声にならない声がした。

私は桶に汲んだ水を思い切り引っかける。

「わっ……！！！！！」

湯気に目を凝らす。白銀の髪に時機の様な白い肌が浮かぶ。

「へぇ？！」

その姿を凝視して、それから三秒ほど遅れて遅れて間抜けた声を上げたのだった。だって、そりゃぁそうだろう。なんたってそこにいたのは、そこにいて顔を真っ赤に染めてそこにいたのは……。

「ウィアド！！！！！」

だったからだ。

6（後書き）

まどかまぎかの営業に営業職の真髄をみた。
そう、営業職って自分の会社に対して半ば宗教的観念がないと出来ないと思うの。
あぁ、印税生活したいわぁ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2702i/

龍とカナリヤ

2011年4月25日10時52分発行